



□巻頭言

熊本学園大学外国語学部教授
外国語学部長 赤井 恵子

私は授業で書物の紹介を基本的に行いませんが、かつて試みたことはあります。『トリスタン・イゾー物語』。個人的に岩波文庫の赤帯（外国文学）を読みまくっていた時期でした。西欧中世の、媚薬を共に飲んでしまったため宿命的に結び合わされた男女の話です。粗筋と結末の一場面——トリスタンの墓からイゾーの墓を目掛けて、三度断ち切っても生えてくる、緑濃

□■□学科の最新ニュース！□■□

新型コロナの影響が続く中で、東アジア学科の年内の入試が終わりました。10月の総合型選抜で8名、11月の学校推薦型選抜では普通課程(指定校)19名、専門課程(指定校)4名、一般公募9名、その他2名の入学が決まりました。後半最初の一般選抜・共通テスト利用などの出願は1月6～27日となっています。

い葉を付けた「花香るいばら」(媚薬を飲んだ直後にトリスタンの心臓の血の中に根を張り広げたのも、同じいばら)——を紹介しました。すると、ある学生の試験答案の片隅にこうありました。「授業内容と関係ないということだったが、読んだ。泣けた」と。学生が<物語の力>を体得してくれる、という機会は、実はそう多くありません。10年に一度あるかないかの経験です。

□文献を利用して言語の歴史を研究する

私の専門は中国語研究で、言うまでもなく、研究対象は言語です。私は多くの方言研究を行ってきましたが、方言研究というのは、まずある地方の口語に対する調査であり、発音、語彙、文法の現象を記録します。しかし、口語の研究には多くの制限があり、対象は現代の生きた言葉にほかならず、言語の歴史を研究するにはすなわち文献の記録に頼るしかありません。一番重要な問題は、おびただしい文献の中で、どれが我々に良い言語の材料を提供できるかということです。

◆
ここではその中の重要な一例を紹介するにとどめますが、それは19世紀から20世紀初頭にかけてのヨーロッパ人の中国語に対する研究の著作です。外国人、特に宣教師は、中国へ行き努力して中国語を学び、それには各地の方言の学習も含まれます。彼らが編纂した教材、辞典、その他の著作は、中国の伝統的な学問の影響を受けずに、口語を重視し、わりと科学的で合理的な記録手段を採用し、素晴らしい記録を残しました。

◆
例として、現代の/e/韻母のある状況を見てみます。歴史上、/e/はもともと/ɔ/と同一の分類で、後に独立して、新しい分類になりました。この現象は明代の文献の中で見ることができますが、発音がどうであるかは、知る由もありません。ある研究者は、当時の発音が現代の/e/と

東アジア学科シニア客員教授 石 汝杰

同じだと考えています。今回、19世紀の外国人が編纂した中国語辞典を利用したところ、新たな発見がありました。

◆
ロバート・モリソンの『五車韻府』(1819)は現代の/e/韻母と対応する韻母を、ay、ě、éの三種類に分類し、彼はayの読音は、Mayの中の母音と同じで、すなわち[ei]であると述べています。しかしサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズの『漢英韻府』(1889)はé(すなわちフランス語のわずかに閉じたe)を用いて表示しています。セラファン・クブルールの『中国古典大辞典』(1890)は、thé(お茶)の中のé(すなわち閉じたe)のように読むと言っています。現代の方言に基づいて証明するならば、単母音の[e]で音価推定すると更に合理的です。注目に値するのは、同時期の掌院パルラディの『漢俄合璧韻編』(1888)が現代の音韻体系に近い分類を採用していて、このことから分かるように、当時現代音で読む/e/韻母がすでに生まれて相当な影響力を有していましたが、完全な優位性を獲得したわけではなく、まだウィリアムズが記録した[e]類の読音と競争していたのです。

◆
以上のこれらの資料に基づく、先行研究と異なる結論を得ることができます。遅くとも1890年前後に、標準語の/e/韻母は、/ɔ/類の韻母とまだ緊密な関係を有して

いましたが、現代の読音（あるいは近い音）は確かに既に生まれていたということです。



これは簡単な例に過ぎませんが、このような文献は歴史的資料の宝庫であり、まだ多くの発掘できる資料が存在することを物語っています。かつて本学大学院で学んだ山口要君はこのような資料を利用して中国語音韻史関連の論文を書き、それによって博士号を取得しました。



言語研究は苦勞があり、また楽しくもあります。言語の教育は私の生涯の事業ですが、今学期末に至りこの仕事はまもなく終点に行き着きますので、離任に先立ち、この小文を借りて学園大学の先生方、学生諸君の多大なるご協力とお世話に深く感謝の意を表します。

□「出張日記」に代えて

東アジア学科教授 矢野 謙一

外国研究者にとって今は鎖国の時代である。防疫対策で手軽に外国にいけなくなった。実はこんなとき、平和な日常と全く違うその国の姿が見える。外国研究者はその現場を見たいものである。ソ連が1991年12月25日に崩壊したとき、「国家が崩壊するとはどんなことだろう」と現場を見にいった。ロシアに入国し、鉄道で目的地まで移動した。途中の駅に着くと、休みでもないのに子どもたちが列車に向かって、手軽に食べられる手作りの料理を頭に載せて売っていた。隣の人がルーブル札を出しても受け取ろうとしない。私がドル札を見せると小学生がひたたくるようになって、食べ物を押しつけてきた。目的地に着き、日用品を買いに市場に行くと、学校の先生たちは国家から給料がもらえないため、学校の備

品を市場で売って、生活費をひねり出していた。教育制度が事実上崩壊していた。

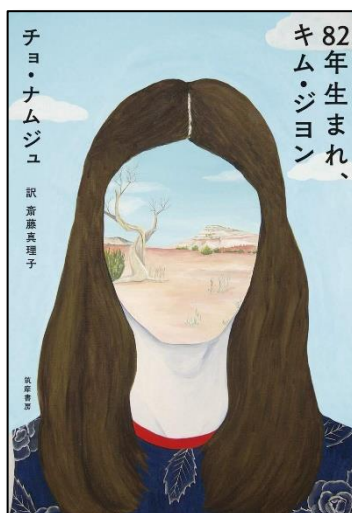
コロナでソウルの繁華街はシャッターを閉じているという。外国人が来なくなった韓国の観光業、ホテル、食堂、お土産屋、観光地を見てみたい。人口密度の高いソウルや釜山の庶民たちはコロナ禍と大不況のなかをどう暮らしているのだろうか。生活を見てみたい。話を聞いてみたい。自由に歩き回れる日が来ることを心から祈っている。

□新書紹介

チヨ・ナムジュ著、斎藤真理子訳『82年生まれ、キム・ジョン』（筑摩書房、2018年）

韓国で130万部以上のベストセラー小説となったこの小説は、日本語にも翻訳され、21万部以上販売された。現在もアマゾンの外国文学作品（その他）部門でベストセラー1位となっている。特に日本では、30～40代の働く母親達からの共感が強く形成されている。小説は、ある女性が学生時代から大学入学、結婚、育児という一連の過程を経る中で経験する、困難や偏見、そして差別などを、淡々と日記を書くように綴っていく。落ち着いた口調がかえって多くの女性からの共感を呼び、韓国では一つの社会現象、ジェンダー・シンドロームを形成した。映画化され、日本でも10月の初めより、全国160余りの映画館で上映されている。小説とは違う映画での、主人公が母方の祖母に憑依したシーンに大きな共感を示す人が多い。映画「パラサイト」と共に、第4次韓流を牽引しているという評価もある。韓国では彼氏へのプレゼント用の本としても人気が高い。もちろん教育用である。

（東アジア学科教授 申 明直）



■編集後記■

日本国内で初めて新型コロナウイルス感染者が出てからまもなく1年がたとうとしています。本学では、11月から韓国や中国語圏への交換留学生選考試験がはじまりました。早くても来年初以降の派遣です。先行きが不透明な中、学生たちが海外に行ける時期は現時点では分かりません。しかし、東アジア学科の学生を中心に多くの学生が選考試験に臨みました。当初はとまどいが見られた学生たちも、今はコロナ後の目標に向けて勉学に励んでいます。（ど）

発行者 熊本学園大学外国語学部東アジア学科
編集人 土井 浩嗣（東アジア学科長）
〒860 - 8680 熊本市中央区大江 2-5-1
Tel 096-364-5161（代表）